裏切らない品質が信頼に

世界へ広がる電子部品支える機能めっき

立山電化工業株式会社
代表取締役社長
園　晶雄　氏

今年は創業80年となられます。

終戦直後の1945年12月に、父の園直龍がめっき工場を引き継いで創業し、農機具や自転車の部品、雨傘などのめっき加工を始めました。経済復興とともに装飾めっきの需要が高まり、県内に増え始めた電子機器メーカーの電子部品の仕事も入るようになりました。

1969年、小矢部市に大手自動車メーカーの二輪工場が進出したのを機に設備を増強し、外装部品の装飾やさび止めのためのめっき加工の全てを請け負うようになりました。一時はオートバイ部品が売上高の３分の２を占めるほどでしたが、その後ヘルメットの着用義務化や自動車の普及による生産台数の減少、生産拠点の海外移転も進む中で、私が社長に就いた翌年の1987年にオートバイを含む装飾めっきからの撤退を決め、電子部品に特化することにしました。

選択と集中で電子部品に舵を切られたわけですね。

電子部品は高いレベルの品質が求められるので、それに応えるための努力を重ねてきました。リールに巻かれた材料を連続的に処理する「フープめっき装置」を1981年に北陸で初めて導入した時は、大きな投資に金融機関を含めて周囲からは「大丈夫か」と心配されました。以降、めっきの対象もコネクタピンやトランジスタ、抵抗器、ＩＣへと広がり、電子関連部品の表面処理が順調に成長してきました。パソコンのＣＰＵに使われるピンのめっきは2000年代には、お客様の世界シェアに絡む仕事をさせて頂くこともできました。

現在はどのような状況ですか。

パソコンの設計が変わり、主力はスマートフォン向けや自動車向け電子部品に移っており、極小部品の必要な部分に径１㎜以下の「スポットめっき」を行うものもあります。

売上げ比率は、コネクタ向けフープめっきが３割、抵抗器向けが３割、基板向けが２割で、その他も電子関連です。

－付加価値の創造と追求－

経営理念は「付加価値の創造と追求を推進し、顧客から必要とされ続ける企業となり、新たな発展を追求し、社会への貢献をし続ける」と、うたっておられます。

要するに「逃げるな、諦めるな」ということです。当社の仕事は、次々と世に出る新たな製品にめっきをしたいというお客様の要望に応えてお手伝いをすることです。これまで新しいチャレンジをする中で、不良が発生して「もうだめか」と思うことも幾度とありましたが、社員が寝ずに頑張ったり、駆けつけてくれた薬品メーカーの方が指導してくれたりして、乗り切ってきました。困難な仕事の中で技術を学び、品質保証の勉強もさせてもらいましたし、お客様の言葉が当社を育ててくれました。

また、信頼関係のある薬品メーカーの方が、技術力のあるめっき先を探しているという電子部品会社に当社を紹介してくださり、事業拡大のきっかけになりました。

社長としては社員を信じて、いかにうまく仕事をしてもらうか。管理職各位が経営の中枢となり社員を引っ張っていける会社を目指してきました。経営方針の策定も10年程前から、幹部に任せるようにしています。

その上で私の仕事は、集まった情報の中で経営判断することと、思い切った決断ができる財務体質にしておくことだと考えています。

－多能工化で補い合う－

2022年に富山県の「働き方改革実践モデル企業」に選定されました。

総務部をモデルとして、属人化している仕事をみんなができるようにしようと、経理や人事などの業務の多能工化を図り、補助し合える体制を構築しました。

また、自分の業務状況を、スマイル（余裕がある）と、泣き顔（忙しい）のイラストをデスクに置くことで表示し、余裕がある人が電話応対を率先してするようになり、毎日の朝礼を夕礼に変えることで、残っている業務を手伝う取り組みを始め、残業が減りました。

製造現場ではどうですか。

当社ではまず現場を経験してもらい、新入社員にも「色々やってもらうことになる」と言っています。管理職はみんな複数部署を経験してきていますし、総務の男性社員も現場を経験します。営業部でも品質保証部から異動した社員が活躍しています。

大きな会社ならスペシャリストを育てることもできるのでしょうが、当社の規模では「この人がいなくなったら困る」ということは避けなければいけません。色々な仕事に就くことで性格や適正が分かりますし、上のポジションに就いたときにも役立ちます。新たな仕事や仕事量の変動に対応できる人材が多く育っていると感じています。

多能工化が図られていますね。人材育成はどのように取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

「かよう塾」という社員が講師を務める社員向けの研修を、年間20講座開設しています。例えば、「基板の知識」では当社が扱っている部品について担当以外の人も学べ、「会計」では、総務の人だけでなく、役職者や興味のある社員にも習得してもらっています。講師として教える社員の力量が上がることも同時にねらっています。

さらに、品質保証部でも必要があるからと、「電話応対」の講習をして欲しいという要望が出て、営業部の応対力の高い社員が講師となり教えてくれています。

今後の事業展望を教えてください。

お客様の新製品づくりの要望に応えるのが当社の役目です。電子部品はどんどん小さく難しくなる中で、お客様からどれだけ宿題をもらえるか、つまり新しい情報をもらえるか。その期待に応えていくことが信頼に繋がります。この積み重ねのお陰で、コスト面で一旦他社に移ったお客様が「やはり立山電化でお願いします」と戻ってこられた仕事もあります。

現在はスマホ向けが主力ですが、自動車部品にも力を入れるため自動車産業の品質規格「ＩＡＴＦ」の取得を目指しています。また、60歳以上の人が働きやすい工場づくりも考えています。

座右の銘をお伺いします。

「これでいいと思ったら終わり」と肝に銘じてきました。精神的にも肉体的にもそうですが、会社も同じで、まずは引っ張る人間がその姿を見せないといけません。

略　歴

1955年９月高岡市生まれ。東京医科大学在学途中の1977年に㈱コヤマケミカルへ入り、1980年立山電化工業㈱に入社。1986年から代表取締役社長。

会社概要

立山電化工業株式会社

創　　業：1945（昭和20）年12月
所 在 地：高岡市赤祖父546番地
資 本 金：5,700万円
事業内容：コネクタ、抵抗器、基板、端子向けのめっき処理
従業員数：190名（2025年4月現在）
売 上 高：37億円（2025年1月現在）
事 業 所：新湊工場
ＵＲＬ：www.tateyamadenka.co.jp